

# たましいは生きている

小川未明

青空文庫



昔むかしの人は、月日つきひを流ながれる水みづにたとえました。まことに、ひとときもどまることなく、いづくへか去さつてしまうものです。そして、その間あいだに人々ひとびとは、喜よろこんだり、悲かなしんだりするが、しんけんなのは、そのときだけであつて、やがて、そのことも忘わすれてしまいます。この話はなしも、後あとになれば、迷めい信しんとしか、考かんがえられなくなるときがあるでしょう。

\* \* \* \* \*

わたしの兄あには、音おん楽がくが好すきで、自じ分ぶんでもハ―モニカを吹ふきました。海うみ辺べへいって砂すなの上うへへ腰こしをおろして、緑みどり色いろのあわ立ちだかえる海うな原はらをながめながら、心こころゆくまで鳴ならしたものでした。無む心しんで吹ふくこともあつたし、また、はてしない遠とくをあこがれたこともあつたでしょう。それは、夕ゆ日ひが花はなのごとく、美うつくしくもえるときばかりではありません。灰はいろの雲くもが、ものすごく低ひくく飛とび、あらしの叫さけぶ日ひもありました。

「正しやうちゃん、この海うみの合がっ奏そうは、ベ―ト―ベンベツベンのオーケストラに、まさるともおとらないよ。人にん間げんが、いくらまねようたつて、自然しぜんの音おん楽がくには、かなわないからね。」と、兄あには、いいました。

戦せん争そうが、だんだん大おほきくなつて、ついに、兄あにのところへも召しやう集しゅう令れいがきました。

わたしは、その日を忘れることができませぬ。いままで、たのしかつた、家の中は、たちまち笑いが消えてしまつて、兄は、自分の本箱や、机のひきだしを、片づけはじめました。

「いけば、いつ帰るかわからないから、ハーモニカを正ちゃんに、あずかってもらうかな。」

こうきくと、わたしは、兄の気持ちを考えて、しぜんと涙がわきました。

「にいさんが、帰るまで、なんでも、そのままにしておくよ。」

「いや、もつと戦争が、はげしくなれば、この家だつて、どうなるかしれんものね。」

兄は、無事で帰れたなら、また勉強をはじめるつもりだつたのでしよう。英語の辞書も、いつしよに渡しました。

しかし、兄は、それぎり帰つてきませんでした。兄の船は、南方へいったというわけでしたが、出発後、なんのたよりもなかつたのです。

わたしは、海辺に立つて、はるかな水平線をながめて、ハーモニカを吹きました。入り日の前の空に、さんらんとして、金色のししのたてがみのような雲や、また、まっ赤な花のような雲が、絵模様のように、飛ぶことができました。兄は、こんなよなたそが

れが、大好きであったと思うと、いまごろ、どこかの島で、この空を見てるのでなからうかと、ひとりでに、目の中のくもることがありました。わたしは、せめて、この真心の、兄に通ずるようと、ハーモニカを吹いたのでした。

また、あらしの日にも、兄のしたごとく、浜辺へ出て、鳴らしました。しかし、兄のハーモニカが、ここにありながら、それを愛する兄の、いないということは、考えるときびしいかぎりでした。

その翌年の夏には、公報こそ入らなかつたけれど、兄の戦死は、ほぼ確実なものとなりました。

ある日、わたしは、波打ちぎわで、清ちゃんと遊んでいました。

「波は、生きているよ。」と、清ちゃんが、いったので、わたしは、

「生きているって、たましいがあるというの。」と、ききかえました。

「うそと思うなら、石を投げてごらん。怒って、大きくなるから。」と、清ちゃんは、ふしぎなことをいうのです。

わたしは、石をひろって投げました。つづいて、清ちゃんが、なげました。ふたりのすること、せせら笑って見ていた、白い波が、だんだん高く頭をもたげて、急にふたりの

足もとをおそいました。

「ほら、おこつた！」と、清ちゃん、叫びました。

わたしは、むちゆうになつて、石をひろつては、できるだけ沖へ近づいて投げると、もくら、もくらと、海はふくれ上がり、大波が、わたしの足をさらおうと、やってきたので、あわてて逃げました。そのとき、砂の上へおいたハーモニカを持っていつてしまいました。

わたしは、波が、またハーモニカを返してくれはしまいかと、しばらく立つて、待つていたが、それは、ついにむだでした。

月の明るい晩でした。わたしは、窓に腰をかけて、どこかで鳴く虫の、かすかな声をきいていました。秋の近づくのを感じたのでした。すると、たちまち、ハーモニカの音がしたのでした。

「あれは、だれがふいているのだろう。」と、こんどは、そのほうへ気をとられました。吹いている人は、歩いているのか、その音は、近くなったり、遠くなったりしました。

「にいさんじゃないか。」と、わたしは、立ち上がりました。あまり、しらべが、よくにっていたからです。外へ出てみようとするうちに、ハーモニカの音は、やんでしまいました。

まだ、そのうたがいの解とけぬ、二、三日にあち後のことです。わたしは、赤あかく夕ゆう日ひが、海うみへ沈しずむのをながめていました。すると、うしろの砂すな山やまのあたりで、ハーモニカの音ねがしました。その吹ふき方かたが、兄あにそっくりなので、わたしは、はつとして、このときばかりは、全ぜん身んがあつくになりました。

「だれだか、見みてやろう。」

ただ、むやみとそのほうへ、足あしにまかせて、かけ出だしたが、いつしか、音ねも消きえれば、さつきまで、ちらほらしていた、人ひと影かげまで、どこへやら去さって、見みえなくなつたのです。わたしは、家いえに帰かえって、このことを母ははに話はなしました。

「それは、気きのせいです。あまりおまえが、にいさんを思おもうから。」と、母ははは、いいました。

しかし、わたしは、気きのせいだとは、信しんじられませんでした。けれど、それ以い上じょうい張はることは、できませんでした。ところが、なんとおどろくことには、こんどはうず巻まく波なみの中から、兄あにの吹ふく、ハーモニカのしらべがきこえたのです。わたしは、さつそく、清せいちゃんを呼よんできました。清せいちゃんは、いつになく、まじめくさって、耳みみをすましました。「きつと、正しょうちゃんのなくした、ハーモニカをお魚さかなが、小ちいさな口くちで吹ふいているんでないか

。「といいました。

その後も、わたしは、ひとりなぎさに立つて、ぼんやりと海をながめることがありました。あるとき、知らない男の人が、わたしのそばに立つて、じつと沖の方をながめていました。顔の色は、日にやけて黒く、その目は、とび出ているようで、いくらか、こわい気がしました。お寺へいくと、よくこんな形をした、木像の仏さまがあるのを、わたしはおもいだしました。こちらが、やさしくものをいったら、怒りはしないだろうと、考えたので、

「おじさんは、なにを見ているの。」と、ききました。すると、怒るどころか、うちとけて、わたしを見ながら、

「あちらの島に、まだ残っている、戦友のことを思っていたんだよ。」と、その人は、答えました。

「まだ、かえらないの。」

「土の中で眠って、永久に帰らないのさ。」

「おじさんは、いつ復員したの。」

わたしは、すぐに兄のことを思い出さずにいられませんでした。



「まだ、一月ばかりにしかならない。いくら苦しんでも、こうして、帰られたものは、しあわせだが、いつまでたつても、もどらない戦友はかわいいそうだ。」

これをきくと、わたしは、情け深い人だと思つたから、  
「おじさん、ぼくの兄も戦死したんです。」といいました。

「やはり、そうか。」と、急に暗い顔になって、うなずきました。いつか、ふたりは、ならび合つて、砂の上に腰をおろし、海の方を向いていました。

「ぼく、いつも、ここに立つて、にいさんを思うんですよ。」と、わたしが、いうと、その人は、目を足もとへ落として、やはりうなずくばかりでした。

「人間は死んでも、靈魂は、生きているのではない？」と、わたしは、ふしぎなハーモニカの音から、おじさんに、こうたずねたのでした。あるいは、戦地にあつて、それを経験したとも、かぎらないと思つたからです。おじさんは、しばらく、なにか考えているようなようすだったが、やがて、顔を上げると、

「それについて、ふしぎなことがある。」といいました。

「ふしぎなことつて、どんなこと。」

「ゆうれいでも、いうんだらうな。」

「えつ。」と、わたしは、びつくりしました。

このとき、つめたい風が、海の上から、さつと陸へ向かって、走ったように感じました。おじさんは、口を開きました。

「前線へ、伝令にいった兵士が、帰りの山の中で道を迷ってしまった。困っていると、ふいにくつ音がしたので、まさしく、敵に出会ったと、身がまえすると、思いがけない、親友だったので、二度びつくりした。あまりおそいので、こんなことではないかと迎えにきたよ。さあ、暗くならぬうち、早くいこうと、戦友は、先に立って、よくこんな道を知っているなどと思うようなところを歩いた。だが、かれはこのあいだの戦争で死んだのではなかったかと思つたので、休んだら聞こうと思つているうち、その姿を見失つてしまった。それと同時に、ふもとの方で、軍馬のいななきをきいたというのだ。」と、おじさんは、話しました。

「靈魂が、親友を救つたのですね。」と、わたしは、その話に感動したのでした。そして、わたしは、兄の吹く、ハーモニカの音が、このごろ、たびたびきこえると、いいますと、

「きつと、きみのにいさんは、家のことを思つていられるのだろう。」と、おじさんは、

答えました。

「そうしたら、どうすればいいの。」と、わたしは、ききました。

「せいぜい、にさんの好きなことをしてあげて、靈魂をなぐさめるんだね。」と、おじさんは、いいました。

そのことを、わたしに教えてくれた、おじさんは、どうしたのか、その後ふたたび見ることができませんでした。

わたしの兄は、なにより平和を愛しました。だから、音楽がすきでした。わたしは、父にねがって、兄のもっていたのと、同じハーモニカを買ってもらいました。そして、それを吹くときには、かならず、兄の気持ちになろうとしました。

わたしの兄は、自然を愛したし、また、だれに対してもしんせつで、なにをするにも、やさしみの心をもっていました。

わたしは、海岸へいくと、まず、兄のしたごとく、砂の上へ腰をおろしました。そして、ハーモニカを吹きました。このとき、空を飛ぶ雲、打ちよせる波、しきりと顔へあたる風、ともどもに、申し合わせたごとくたたずんで、

「ききおぼえのある、なつかしい音だ。」と、いつているようでした。

わたしは、ますます、兄あにの目、兄あにの心こころをもってきました。すると、かれらは、  
「あれを吹ふくのは、弟おとうとか、兄あにそっくりじゃないか。また、この浜はま辺べへも、昔むかしのような平へい和わ  
が、やってきたな。」と、ささやき合あっているのです。

わたしの真ま心こころで、兄あにのたましいも、はじめで、なぐさめられたものか、ふしぎなハ  
ーモニカねの音ねも、それ以い来らいしなくなつたのでありました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「たましいは生きている」桜井書店

1948（昭和23）年6月

※表題は底本では、「たましいは生《い》きている」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# たましいは生きている

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>